



## 『絵巻物による日本常民生活絵引』がこだわるもの あるいはマルチ言語版が伝えていかなければならないもの



君 康道 (COE共同研究員 / 東京大学大学院・専任講師)

本COEプログラム第1班「図像資料の体系化と情報発信」の共同研究員として参加させていただき、その中で、主に『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下『日本常民生活絵引』と略す)のマルチ言語版の編さんプロジェクトに関わらせていただいている。この『日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さんにあたっては、研究会で種々検討された結果、全5巻の内容を3巻分に吟味し直して纏められることが決まり、本年度はその手始めとして、第2巻に収められている『一遍聖絵』の編さん作業が進められている。

実はこの『日本常民生活絵引』なるもの、その世界ではあまりにも有名な書物であるにも関わらず、恥ずかしながら私自身が今まで身近に利用することは殆どとていいほどなかった。そのため実際には共同研究員とは名ばかりで、ある意味私も一人の学生として、このプロジェクトの中で本書についてのまさに「いろは」から勉強させていただいている。手始めとなる『一遍聖絵』の編さんにあたっては、『日本常民生活絵引』そのもののみならず、その題材となっている絵巻の『一遍聖絵』自体や一遍自身についても知識を得る必要を痛切に感じ、図書館で美術書を借りて原本の『一遍聖絵』の全容に目を通し、関連書を繰り、さらにはそれらのゆかりの地を訪ねてみたりもしている。そのように『日本常民生活絵引』や『一遍聖絵』について調べていく中で、ふと気がついたことがある。それは『一遍聖絵』の中では重要と思われるような場面が、『日本常民生活絵引』では殆ど取り上げられていない場合がある、ということである。

一例を挙げてみよう。原本の『一遍聖絵』第10巻には一遍の厳島神社参詣の様子が描かれている。これは弘安10年(1288)一遍の2度目の厳島参詣の様子を描いたものだそうで、そこには船で厳島へ渡る一遍に続き、厳島神社において一遍を尊んで舞楽が演じられている様子が描かれている。海上社殿の建築美の描写もさることながら、そこに描かれている人々の表情、動きのなんと豊かなことか。この精緻な人物描写も『一遍聖絵』の大きな

特徴と言えるであろう。

しかし、このように『一遍聖絵』において非常に興味深い描かれ方をされている厳島神社ではあるが、『日本常民生活絵引』に目を転じてみると、なぜかこの厳島神社の社殿は全く取り上げられていない。『日本常民生活絵引』において厳島神社の場面が取り上げられているのは「船」の項目においてのみであり(新版第2巻pp.144~147)その場面に描かれている客船、渡し船、商船の部分が切り取られ、それらについて解説が付されているのみである。

さらに興味深いことに、社殿が全く取り上げられていないにも関わらず、なぜか船の後方に描かれている大鳥居だけが、厳島神社に関連する事物の中で唯一『日本常民生活絵引』に取り上げられている。この『日本常民生活絵引』は取り上げられた場面を模写する際に、あえて不必要と思われる部分は大胆に白抜き状態にカットされているのだが、この厳島神社の大鳥居はカットされることなく、絵引の対象の一つとしてキャプションが付けられている。しかし解説文の中ではこの大鳥居も取り上げられることなく、船についての解説に終始している。

厳島神社の大鳥居と言えば、社殿とともに海上に浮かぶ荘厳な姿がやはり思い出されるが、その形はいわゆる「両部鳥居」という、主柱の前後に控柱を立て、上下二本の貫で繋がれた非常に存在感のあるあの形である。しかしこの『日本常民生活絵引』に描かれている大鳥居は、いわゆる「明神鳥居」と呼ばれる二本足の掘建ての形のものである。鳥居を浜辺に建てる場合、明神鳥居のような二本足の鳥居ではせっかく掘った掘建ての穴が潮の干満で埋まってしまう、その作業に困難を伴うため、柱を掘建てにしなくともよい両部鳥居の形の方が理想的なのだそうだ。この時期の厳島神社の大鳥居が果たして本当にこのような形であったかどうかは、今の鳥居の形しか知らないものとしては非常に興味のあるところであるが、そのようなことにさえ『日本常民生活絵引』には一切触れられていない。更に言えば、『一遍聖絵』に描かれている厳島神社の社殿配置そのものも、実は現在のものとは

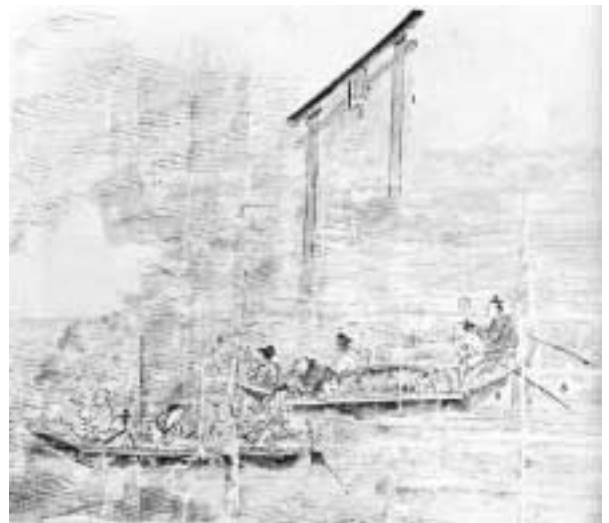
全く異なるようだ。

なぜこのように興味深いと思われる事例が、『日本常民生活絵引』においては全て排除されているのだろうか。それはやはり、この『日本常民生活絵引』が、「常民」の「生活」というものに非常に強くこだわっているということの表れのように思われるのである。厳島神社社殿の創建は推古天皇即位元年(593)と伝えられるが、今のように優美な海上社殿が造営されたのは、久安2年(1146)に安芸守に任ぜられた平清盛の崇敬を受けるようになってからだという。平家一門の篤い信仰に基づき造営された建築物に関しては、澁澤敬三をはじめとする『日本常民生活絵引』の編者たちは「常民」の「生活」には関わりが無いということで、思い切って場面の切り取りは行わなかったのではないだろうか。そう考えると、厳島神社の舞楽の場面に描かれている人物は僧侶を除くと上層階級とおぼしき人たちが主であり、その服装やしぐさも当然対象として取り上げられるべきものではない。あくまで本書は「常民」の「生活」の「絵引」であり、単なる絵巻物の解説や歴史絵引ではないのである。ただ唯一厳島神社の大鳥居だけは、上層階級の生活と常民の生活を分かつ「シンボル」として、意図的に取り上げられたのかもしれない。

しかし、絵巻の順序やストーリー性を全く排し、その中に描かれた図像資料を抽出してそれぞれに名称を与え、「住居」「交通・運搬」など15の独自の分類に従って配列し、解説を施すという本書の構成自体を今一度考えてみても、そこに「常民生活」というものに大きくこだわっている本書の思いが見てとれよう。あるいはそれは、本書を最初に企画した澁澤敬三の思いと言い換えてもよいかもしれない。こうした『日本常民生活絵引』が前例をみない仕事であったと同様に、今回のマルチ言語版の編さんもそれまで前例をみない仕事であり、具体的にどのような利用者を対象として編さんを進めていけば良いか、研究会では今も議論が重ねられている。対象者を広げれば広げただけそこに詰め込む情報量や翻訳にかかる作業量が比例して増え、逆にそれらを少なくしようとすると今度は対象者が限られてしまい、極端に言えば日本語を解する一部の研究者のみしか利用できない本末転倒なものが出来上がってしまいかねない。それをどこでどのように折り合いをつけていくか、未だ暗中模索をしながらその作業が進められている訳だが、そうした中でこの『日本常民生活絵引』について勉強すればするほど、本書に込められた編者たちの思いというものが、いかに大きい

ものであったかがわかるような気もするのである。

あまりにも大胆とも思える澁澤敬三のアイデアと共に、その具体化に力を注いだ編者たちの本書への思いが、今も本書が広く利用されていることの大きな所以なのであろう。『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さんにあたっては、やはりただ単純にその内容を翻訳するばかりではなく、「常民」の「生活」の「絵引」にこだわった彼らの思いそのものも伝えていかなければならない。事業推進に残された時間はそう多くはないが、本プロジェクトが将来の人類文化研究に果たす役割の大きいことを信じて、微力ながら私自身今後も作業に従事出来ればと思う。



『絵巻物による日本常民生活絵引』に取り上げられた厳島神社前の風景(新版第2巻p.145) 原本の『一遍聖絵』では、左方に厳島神社の社殿が描かれている。



現在の厳島神社大鳥居。(筆者撮影)